



養護学校における美術の教材に関する考察 (8)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小平, 征雄, 福田, 隆真, 山中, 佳寿美, 岩田, 和己, 高坂, りゅう子, 堀井, 朋子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004246

養護学校における美術の教材に関する考察（8）

小平 征雄・福田 隆真・山中佳寿美・岩田 和己・高坂りゅう子・堀井 朋子

はじめに

本稿は、養護学校における美術教育の意義、役割を明確にするために実践的な教材研究を蓄積している報告¹⁾の一部である。養護学校において、社会的自立を実現するために、児童、生徒の生活力を高めることが大切な要件であり、これを具現化するように教育課程が編成されている。造形活動で培われる創造力や感性、作業能力は、生活力に密接に関係していくものである。しかし、養護学校の児童、生徒にこれらの力を付けていくためには、様々な配慮が必要になってくる。一人一人の的確な実態把握を行い、特性をつかみ、個々に合った目標の設定及び課題の提示を行うことや、児童、生徒の作業過程において、できる状況を与えてやるような教材・教具の工夫をすることが必至である。社会参加を間近にした、高等養護学校や養護学校高等部の美術、作業の指導を進めながら、造形活動が、生徒が将来的に社会の中で精一杯自立への努力をし、ものごとに積極的にかかわり、自分なりの生きがいを感じることができるとなることをめざして指導方法を模索している。

1 精神薄弱高等養護学校における絵画の実践——実態表を用いた指導——

はじめに

美術の時間、生徒が顔を輝かせて取り組み、喜びを感じて制作する姿を見ることは教師側の切なる願いである。学習に対する意識を目覚めさせ、活性化させたいと考えているが、絵を描くことが得意な生徒を除くとほとんどの生徒が美術に取り組むこと自体に抵抗を抱いている。生徒一人一人の特性をふまえて授業を構築することができれば、生徒個々の意欲が喚起され、自主的に学習しようとする態度が培われるのではないかと、また、そのためにできる限り自己の特性に合った表現方法を選択させてみてはどうか、と考え「すべての生徒の特性を生かす授業はいかにあるべきか」～意欲的な表現活動をさせるために～というテーマを設定して取り組むことにした。

養護学校の生徒の特性は幅広い範囲にわたるが、今回は不得意面を克服するよりも、得意面、良い面を生かす視点に立ってテーマに迫ることにした。そのために美術科独自の実態把握を行い、その結果をいかに授業の中に生かしていくのかを探ってみたいと考えた。

(1) 指導体制と指導方法

本校の美術科では、主として導入時を除いて個別指導を中心に行い、指導体制は指導者3名、生徒約20名で進めている。

研究テーマの「意欲的な表現活動」を行わせるためには、生徒一人一人の特性を踏まえた指導が大切である。そのためには生徒の実態を把握する必要がある。美術科では特別な検査を行うのでは

なく、授業の中で制作した作品を見直すことから、生徒の特性の一端を知る手だてになると考えている。また、授業では生徒の特性を生かすことに配慮し個別指導においてできるだけ生徒が「このような作品を作りたい。」というイメージ(思い)や願いを引き出して心の安定を図り、技術面表現面での理解や工夫する楽しさに気付かせるようにしている。そのことから完成した作品に対し自信を持たせることができるのではないかと考えた。

今回は、生徒の精神的な発達段階(作品の発想の広がりを知るためのもの)は、鈴木ビネー式知能検査(高等部入学時)から掌握し、生徒の技術を知るために一学年時の授業の作品の成果をもとに一人一人の実態表を作成した。(表1)実態表を参考に、創造力が豊かで技術の高い生徒には高い内容で工夫させたり発見させたりして取り組ませてきた。創造力は高いが技術が伴わない生徒には、技術を高める指導を行ってきた。創造力は幼いが技術の高い生徒には、イメージを引き出すような働き掛け方を工夫した。創造力、技術ともに幼い生徒には、易しい課題を与えて少しでも作品に思いが活かされるように指導してきた。

生徒の表現方法の選択肢を広げることからも、生徒が自ら考え、活動に参加しているという充足感と制作意欲を高めることができると考えている。今回は同一題材に対し、3種類の表現方法を用意した。それぞれの表現方法について説明を行いどの方法で制作したいかを考えさせ、できるだけ自分で選択させている。但し、表現方法は教師の意図によるものであり、作品にそれが反映されてくることを期待している。

表1 絵画表現における個別実態表

題材	項目	生徒名															
		A	B	C	D	E	F	G	II	I	J	K	L	M	N	O	
自然の形・物の形	○を置くことができる	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	○○○○○を置くことができる	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	~~~~~を置くことができる	●	●	×	●	●	●	●	●	●	●	△	△	●	●	●	
	~~~~~を置くことができる	●	×	△	●	●	●	●	●	●	●	●	●	△	△	●	
	~~~~~を置くことができる	●	×	×	×	×	×	×	×	●	●	●	●	×	×	●	
	~~~~~を置くことができる	△	△	×	×	×	×	×	●	△	●	△	△	●	×	×	
	~~~~~を置くことができる	●	×	×	●	●	●	●	●	●	×	×	△	×	×	×	
物の形・動物の形	円形のなぐり描きができる	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	顔と足で人間を表現することができる	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	顔、足以外に、胴体、腕、足を描いて人間を表現する	●	●	×	●	×	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	物の上下を直線して置くことができる	●	●	×	×	×	●	●	●	●	●	×	×	△	△	●	
	基礎線を置くことができる	●	/	×	×	×	×	×	●	×	/	×	×	×	×	●	
	画面全体に形を配置して置くことができる	●	●	×	●	●	●	△	●	△	●	×	×	×	×	●	
	性別を直線して置くことができる	●	×	×	●	●	●	●	●	×	●	●	●	△	×	●	
写実的な写実の発生	説明すると理解される写実画を置くことができる	●	●	×	●	●	●	●	●	●	●	●	●	△	×	●	
	視覚的な写実画を置くことができる(輪廓)	●	●	×	●	×	●	×	●	×	●	×	●	×	×	●	
	視覚的な写実画を置くことができる(立体)	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
	配色を考えて色を選択することができる	●	●	×	●	●	△	△	●	×	×	×	×	×	×	●	
	色	×	×	×	●	●	×	●	×	×	●	●	●	×	●	●	
	刀に介わせて三角刀で削ることができる	●	●	×	●	●	●	●	●	△	●	●	●	●	●	●	
	曲線や細かいところも丁寧に削ることができる	△	△	×	●	●	×	×	●	×	×	×	×	×	×	△	
色の三原色を使った絵画	赤・青・黄を使っていろいろな色を作ることができる	●	×	×	●	●	●	×	●	●	●	●	●	×	×	●	
	混色した色に合った名前を付けることができる	●	×	×	●	●	●	●	●	●	/	●	●	×	×	●	
	切り抜いた紙を重ねて表現することができる	●	×	×	×	●	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×	
	配色に気をつけて貼ることができる	●	●	×	●	●	●	●	●	×	×	×	×	●	●	×	
	単純な形をばさみで切り取るることができる	●	●	×	●	●	●	●	●	●	●	△	△	●	●	△	
	手、はさみを使って細かい表現を工夫することができる	△	×	×	×	△	△	△	●	△	×	×	×	×	×	×	
	I Q (作品の発想の広がりを知る)	4	6	5	8	2	4	7	7	5	3	7	4	5	4	4	9

●:できている △:できているが少しづれている ×:できていない /:未実施

(2) 題材「働く友達（現場実習の絵）」

①題材設定

本題材では、生徒に「やってみたい」「これならやれる」という気持ちを持たせ、生き生きと制作させることを最大のねらいとして学習を進めている。そのために、題材は生活に根ざしたものを選ぶようにしている。学習したことを単なる知識としてではなく、実体験として全身で受け止めたものの方が、より具体的でわかりやすい内容になるからである。「働く友達」は高校2年生になって初めて経験した現場実習での様子を描くものである。自分や友達、職場の人・様子を描くことにより、「身体の動き」や「現場実習で働いたことを省みること」などを考えさせることを意図して本題材を設定した。

②生徒の障害の実態

- ・精神薄弱：軽度（IQ 50～75）、中度（IQ 25～49）
- ・併せ持つ障害及び疾病  
 てんかん（7名） 自閉的傾向（5名） 言語障害（2名） ダウン症（1名）  
 難聴（2名） 心電図異常（1名） アレルギー性鼻炎（1名） 副鼻腔炎（1名）  
 貧血（1名） 扁桃肥大（1名） 先天性無虹彩（1名） 義眼（1名）  
 弱視・雑性乱視（1名） 未熟児網膜症（1名） 喘息（1名） アトピー性皮膚炎（1名）

③指導に当たって

指導に当たって次の3点に留意して行った。

○絵を描くことの抵抗感を取り除くための工夫

- ・実習での様子をイメージしやすくするために、プリント（表2）を用意し記入させる。
- ・描こうとするポーズを実際にとらせ、腕や足の曲がり方、長さ、顔の向き、手の大きさ、手先の形などに気付かせる。
- ・参考作品（生徒作品）を見る視点を決めて鑑賞させる。
- ・消しゴムを使わず、失敗した線を残したまま描かせる。下描きの紙は何枚でも与える。画面に大きく描くようにさせたり、描いた中で良い所を切りぬいて張り合わせるなど工夫をさせる。
- ・人体の模型を動かしてポーズの形をつかませる。
- ・教師のアドバイスをカードに書き、目に見える形で気付かせて意識化させる。（生徒の実態に合わせて）（表2）

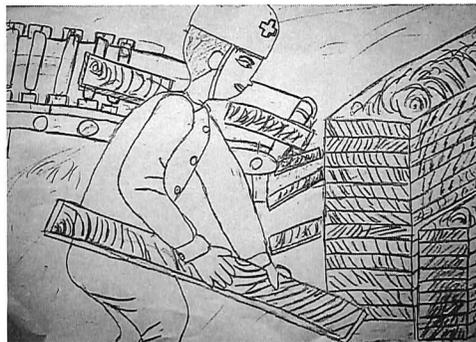
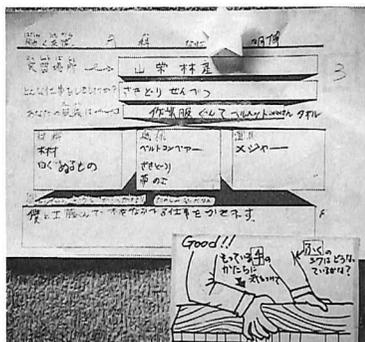


表2 構想カードとそれをもとにして描いた下絵

○主体的に取り組ませるための表現方法の選択

- ・同一の下描きを用いて、紙版画、木版画、水溶性色鉛筆で表した参考作品を見せ、好きな方法で取り組ませる。（図1～3）



図1 紙版画による表現



図2 木版画による表現

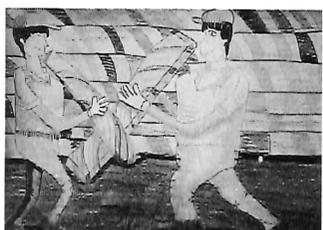


図3 水溶性色鉛筆による表現

○個別指導の工夫

- ・生徒の実態をふまえ、一人一人に合わせて様々な変化を付けて指導を工夫する。

④指導目標

- ・働いたときの気持ちを思い出して描くことができる。
- ・働く人の身体の動きを意識して描くことができる。  
（顔の向き、腕や脚の曲がり具合や手先の表現など）
- ・3種類の表現方法から自分のやってみよう方法を選ぶことができる。
- ・手順を選びながら、楽しく制作することができる。

⑤指導計画（20時扱い）

<第1次>教師が用意したプリントに実習での様子を書き入れる。

<第2次>プリントをもとに下絵描き（鉛筆）をする。

- ・職場にあった道具や材料を思い出させたり、身体のバランスや動きに気を付けさせたりする。

<第3次>生徒の選択した表現方法を用いて制作する。

- ・下絵に軽く霧吹きをし、エッチングプレスを使ってそれぞれボール紙、画用紙、版木に写す。
- ・紙版画（紙を貼る順序、はさみで切る正確さ、大きさ、摺りの作業などの学習）
- ・水溶性色鉛筆を使っての彩色（混色、濃淡の工夫、光や影の彩色などの学習）
- ・木版画（彫刻刀の扱い方・種類・向き、紙に付ける配色の工夫、摺りの作業などの学習）

<第4次>お互いの作品を鑑賞する。

⑥評価の観点

- ・働く人の身体の動きを意識して描くことができたか.
- ・自分でやってみたい表現方法を選ぶことができたか.
- ・手順を聞いて、楽しく取り組むことができたか.
- ・わからないところは教師に聞くことができたか.

⑦生徒作品



図4 紙版画による表現



図5 紙版画による表現



図6 木版画による表現



図7 木版画による表現



図8 水溶性色鉛筆による表現



図9 水溶性色鉛筆による表現



図10 水溶性色鉛筆による表現

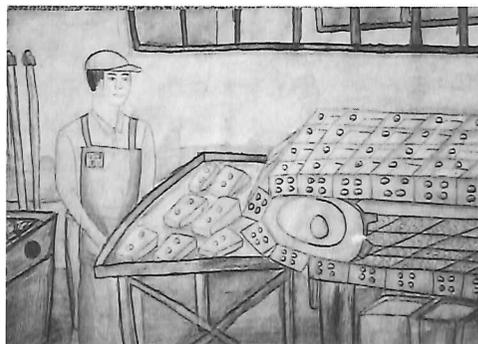


図11 水溶性色鉛筆による表現

### ⑧考察

本題材では、生徒の特性を理解するための方法と、一人一人の実態に合わせた指導の工夫が最大の課題であった。その資料として実態表を活用したが、その他、教師間での話し合いによる共通理解が必要であると感じた。また、生徒作品を見てもわかるように、それぞれの生徒が描いたわずかな表現の違いを取り上げ、生かすように教師自身も自由な発想を持って指導することから生徒も表現する幅広さに気づき、面白がって伸び伸びと取り組むことができたように思う。今回は様々な教材を用意していたことから、教室内での雰囲気も高まったものになった。特に同一題材に対し、三種類もの表現方法を用意することにより、意欲の喚起を図った。これは、水溶性色鉛筆による彩色、紙版画、木版画の三つであるが、自分の得意なものを選択するという自主的な活動を意図的に作り出すためである。抵抗感を感じないで、イメージのふくらみやすいものから楽しく学んでいかせるためであり、生徒は、どれにしようかと目を輝かせていた。また、生徒が意欲的に取り組んだため、授業の流れが良く、自分の作品に対する自覚が強くなったためではないかと思う。

今回は、この選択の方法について、生徒に自分で選ばせるものと、教師が一学年の時に行った学習内容から得た資料により、その生徒により良いものと思われる方法を提示するものの二通りが考えられていた。前者の方法では、生徒の意欲を大切にしているため、直接意欲面と結び付けやすい。生徒が自分の技術的にも得意なものを選ぶことができれば、よりテーマに近い内容として進めることが可能となる。その反面、自分の苦手、得意の判断の難しい生徒もあり、不得意な方法を選んでしまうケースもあった。その場合、内容を易しく変化させてやったり、始めに簡単な方法で作らせた後、その生徒に合うと思われる方法で行わせてみた。後者の方法では、教師がその生徒にこの方法で表現力を伸ばしたいと考えて提示するのであるから、教育的効果は大きいと考えられる。しかし、生徒が受け身の学習になりやすい点に留意しなければならない。

また、三種類の方法で行ったことから、教師自身が生徒の意外な面に気付くことができ、興味深いものがあった。今回行った授業が、実際にどれほどの効果をもたらしたか、具体的な指導場面に即した方法や内容について更に検討が必要であるが、教師が常に生徒の実態に合わせた指導方法を模索する姿勢を持ち続けていくことが大切である。

(山 中 佳寿美)

## 2 精神薄弱高等養護学校における窯業実習の教材に関する考察

### — ひも作りによる花瓶の制作 —

#### (1) 題材設定

本校で行っている窯業の工程を大まかに表すと、土練り、成形、乾燥、素焼き、釉掛け、本焼きとなる。このなかで生徒が一番時間を費やし、指導が必要となってくるのが成形である。成形方法には、手びねり、ひも作り、板作り、鋳込みなどがあるが、いずれの方法においても、粘土の特徴を理解させながら、手や指を通して伝わる粘土の感触をたよりに作らせることが大切である。

ひも作りは、粘土の特徴を理解したり、手や指の感覚を高めたりするには最適な方法であるので、入学直後の窯業実習を始めたばかりの生徒に行わせることがふさわしいと考えた。ひも作りで花瓶を作るという題材は、自分の好きな形を作ることができ、創造する楽しさも味わわせることができる。また、花瓶は日常生活の中で見慣れているもので、制作後は使ったり飾ったりできることから、生徒が興味や関心を持って制作に励むことができた。

#### (2) 指導目標

- ・ひも作りの方法を理解させる。
- ・粘土の特徴を理解させる。
- ・手や指の感覚を高めさせる。
- ・手や指の巧み性を高めさせる。
- ・創意工夫の気持ちを持たせる。
- ・制作の喜びを味わわせる。

#### (3) 指導過程

作業工程	学 習 内 容	指 導 上 の 留 意 点	道 具
	・たたら作りの準備をする  ・粘土を手でつぶした後、延べ棒で平らに延ばす。 (図12)	・机、粘土板、木片をクランプではさんで固定する。机とクランプの背の部分にすき間があかないようにさせるとともに、クランプの位置は、粘土板の端にする。 ・粘土は、手でつぶしすぎないようにさせる。 ・延べ棒に粘土が付着した場合は、濡れ雑巾で拭き取らせる。	粘土板 布  たたら板 延べ棒
	・型を用いて円形に切り抜く。(図13, 14)  ・切り抜いた粘土（以後底と言う）を濡れ雑巾で包む。(図15)	・切り抜くときは、針を立てながら型にそって動かさせる。 ・粘土くずは、バケツに入れさせる。	針 型 濡れ雑巾 クランプ 木片 バケツ

<p>ひも作り</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 不用な物は後始末をしてひも作りの準備を行う。</li> <li>・ 粘土を転がしてひもを作る。(図16)</li> <li>・ できたひもを濡れた雑巾で包む。(図17)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 見本と同じ太さのひもを作らせる。</li> <li>・ 粘土板に粘土が付着したときには、へらで取り除かせる。</li> <li>・ ひもは数本作らせる。</li> <li>・ ひもは、どこも同じ太さに作らせる。</li> </ul>	<p>へら 棒</p>
<p>ひも積み</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ひも積みの準備をする。</li> <li>・ 底をろくろの中心に置く(図18)</li> <li>・ 底の周辺部にひもをのせる。(図19)</li> <li>・ つなぎめを指でこすって底とひもをくっつける。(図20, 21)</li> <li>・ ひもをのせてはこするを繰り返して、花瓶の形にする。(図22, 23)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ろくろは、粘土板の上に置かないようにさせる。</li> <li>・ ひもは、底の外側にはみださないようにさせる。同様に積み上げていくひもも外に、はみださないようにさせる。</li> <li>・ 口が開いた形にするときには、徐々に開くようにさせる。特に下の腰の部分はあまり開かないようにさせる。</li> <li>・ 開かせるときは、やや外側にひもをのせさせてもいい。</li> <li>・ つばませるときには、やや内側にひもをのせさせてもいい。</li> <li>・ つなぎめは、縦にこすらせる。</li> <li>・ つなぎめは、完全に消えるようにこすらせる。</li> <li>・ 内側は、特に丁寧にこすらせる。</li> <li>・ 極端に下までこすらせない。</li> <li>・ 形を考えさせながら積ませる。</li> <li>・ 常に高さをそろえさせる。</li> <li>・ 口片部の形は、工夫させる。</li> <li>・ 時間内に積み上げられなかった場合はビニールに包んでおいて次の時間に続きを行わせる。</li> </ul>	<p>ビニール</p>
<p>仕上げ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 仕上げの準備を行う。</li> <li>・ 濡らしたなめし皮でこすって、花瓶の表面をなめらかにする。(図24)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ なめし皮を濡らしすぎないようにさせる。</li> <li>・ 花瓶に空缶を入れ、形を崩したり、中に水を垂らさないようにさせる。</li> </ul>	<p>なめし皮 空き缶</p>

<ul style="list-style-type: none"> <li>・切り糸で花瓶をろくろから切りはなす。 （図25）</li> <li>・花瓶を乾燥棚にしまう。</li> <li>・道具を片付ける</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・切り糸は、ろくろにつけたまま引っ張り切る。</li> <li>・割れにくくするために、底を軽く叩いて引っ込ませてから乾燥させる。</li> <li>・底に生徒の名前を入れておくと焼き上がった後に作者がわかりやすい。</li> </ul>	<p>切り糸</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------

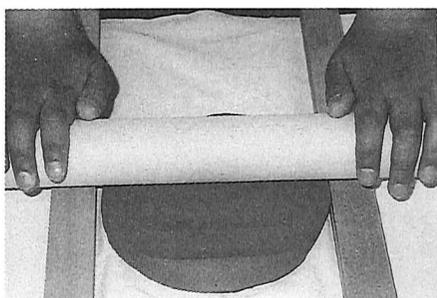


図12

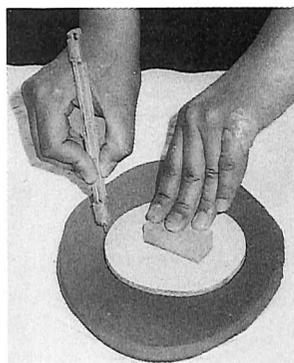


図13

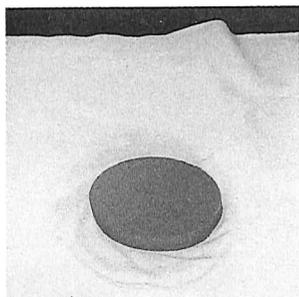


図14

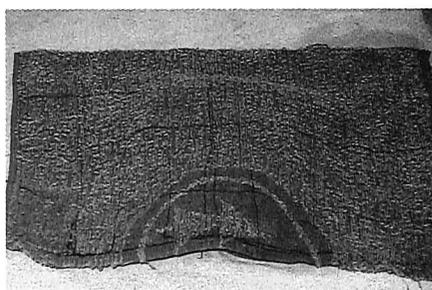


図15

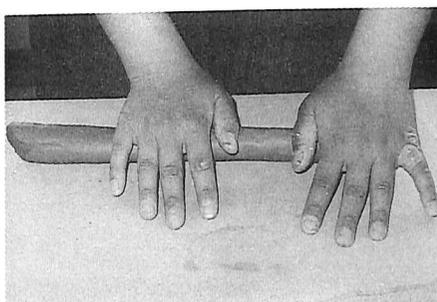


図16



図17

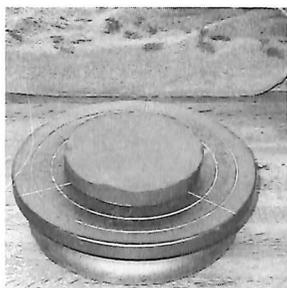


图18



图19



图20



图21



图22



图23



图24



图25



图26

(4) 考察

ひも作りのポイントは、同じ太さのひもを作るということと、完全につながめをこすり合わせることである。従って、粘土で同じ太さのひもを作る練習、ひもをまっすぐに積む練習を繰り返して行った。最初、積み上げることができなかった生徒も練習を重ねるうちに習得して高く積み上げられるようになってきた。ひも作りの基本であるこの2つのことを技術的に身に付けさせてから、自分の好きな花瓶を作るという課題を与えた。制作過程においても絶えず、この2つのことを指示しながら意識させていった。また、焼き物の性質や花瓶の用途を考えさせながら、ひびや割れが入らないように丁寧にひものつながめをこすらせた。花瓶の外側は後からこすることができるが内側は手が入らなくなるので、特に丁寧にこするように指示を与え、やり方を覚えさせた。

要領がわかってくると、生徒は自由自在に形が作れることに喜びを感じ、積極的に作業に取り組むようになってきた。特に、口片部の形によって花瓶の雰囲気が変わることを知ったときは、素直に驚きを感じ、自分で考えながら形を変えてみようという意欲が見られるようになってきた。

(図26) 技術を身につけることにより、創造力が培われていったと思われる。ひも作りで習得したものを土台にして、他の成形方法の技術も生徒が会得していくことを確信した。

(岩田 和己)

### 3 精神薄弱養護学校の陶芸における教材・教具の工夫

(1) 自助具、補助具（ジグ）について

障害がある生徒たちにとって、陶芸制作などにおける作業の内容、手順を理解しても、通常の作業方法や工具類ではうまく進めることができない場合が多い。これを補うために工夫されたものが自助具、補助具である。一般的には自助具は、生徒の作業上の機能が未発達なために十分な作業ができない場合に、その機能を助けるために工夫された教材・教具である。また、補助具は、作業の正確性、量産性を図って工夫されたものである。しかし、実践を通しては自助具、補助具の厳密な区別はつきにくいので、学習場面における自助具、補助具を総称して「ジグ」と呼ぶことにしている。ジグを使って作業を進めることは、どの生徒にも作業に参加できる喜びやものを作り上げる喜びを味わわせることができ、作業意欲、習慣、態度の養成が可能になってくる。

ジグの作成上の留意点は次のようにあげられる。

- ・生徒の手指や両手の動かし方、視線、姿勢、身体的位置などを観察し、実態に応じたものであること。
- ・ジグを使って行う課題が生徒に分かりやすく、操作しやすいものであること。
- ・生徒の注意を引き付け、意欲を喚起させ、使用中に生徒の反応が強化させるものであること。
- ・一つのジグは誰にでも、どの題材にも合うものとは限らないこと。
- ・ジグの使用が適当なものであるか、絶えず評価してみる必要があること。
- ・使用してみて、個人に合わない場合は、その原因を究明し再度作り変えること。

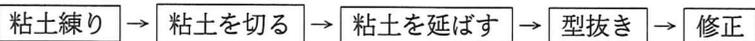
(2) 作業学習「陶芸」における「粘土切りジグ」の実際

①「陶芸」指導年間計画

月	時数	題材名	A：泥しょうい込み	B：手びねり
4 ・ 5	49	A：花器（一輪ざし） ・焼き物への興味・関心を持たせ、作業学習の約束を知る。 B：ふた付き入れ物 ・粘土を練る、延ばす、切る、接着の方法を知る。		
6 ・ 7	36	A：器（茶わん大，小，ストローカップ） ・作業工程を知る。陶芸で使用する名称や用具を知る。 B：かさたて ・協力して作業に取り組めるようにする。		
8 ・ 9	36	A：鉢物（小鉢，中鉢，大鉢） ・泥しょうい込みの技法を知る。 B：かさたて ・修正の仕方を知る。		
10 ・ 11 ・ 12	72	A：食器（茶わん，そばちょこ，とっくり） ・釉薬溶き，釉薬掛けを知る。 B：マガジンラック ・粘土の特性を理解させ，作品を丁寧に扱うことを知る。		
1 ・ 2 ・ 3	47	A：菓子器（小皿，中皿，大皿） ・鋳型や用具を大切に扱うことを知る。 B：はしおき ・粘土を型に合わせて切り抜き，接着の技法を知る。		

②手びねりの工程及び指導上の留意点

手びねりでの制作の際には、粘土の特性を理解させ丁寧に最後まで作業に取り組ませることや成形の技能を高めさせることを目標としている。手びねりの工程は次のようになっている。



型抜きをするときに粘土をむだなく効率的に使うために、土練機で練った粘土を均等な大きさに切ることが必要になってくる。土練機から出てきた円柱型の粘土を見当を付けてテングスで輪

切りにすると厚さがバラバラになり、切り口も斜めになることが多い。また、見当を付けるということは特に、本校の生徒にとって取り組み難い課題である。そこで、「一人でも同じ厚さに粘土を切ることができるように」と考え、「粘土切りジグ」を作成した。

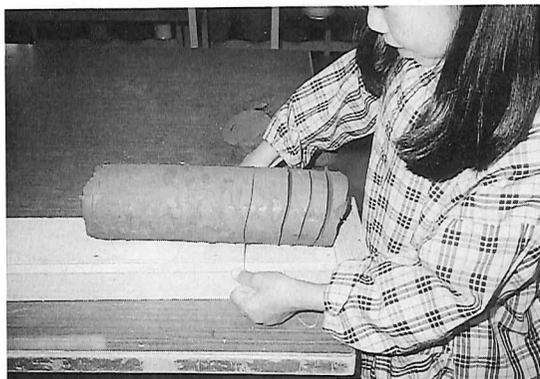


図27 ジグを使わないで粘土を切る



図28 粘土の切れ方

### ③「粘土切りジグ」作成過程

ジグを作成し、実際に生徒に使用させながら改良していった過程を順次、述べていく。

#### ・第一次

土練機から出てくる直径10cmの円柱形の粘土の固まりが納まるような台座を木で作り、両側に15mmごとに刻みを入れた板を立てた。刻みの間にテングスを入れ、両手でピンと引っ張るようにして切る。

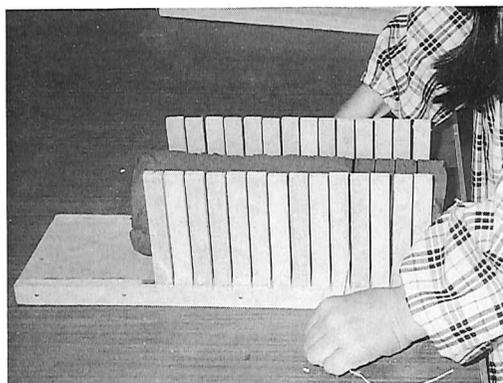


図29 第1次ジグ



図30 粘土の切れ方

結果：15mmの均等な厚さに粘土を輪切りにすることはできたが、テングスが底まで届かず、下の部分がくっついたままになっている。

課題：粘土の下の部分まで切れるために、テングスを持つ両手が台座の下までいくようにしたい。

・第2次

第1次で作成したものを、6 cmの高さの木製の台に乗せて切る。

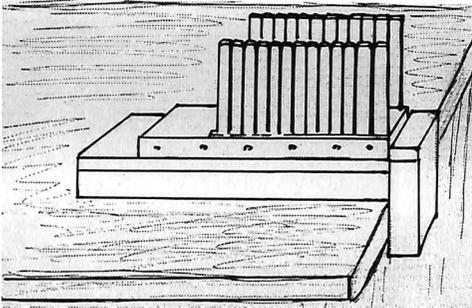


図31 第2次ジグ

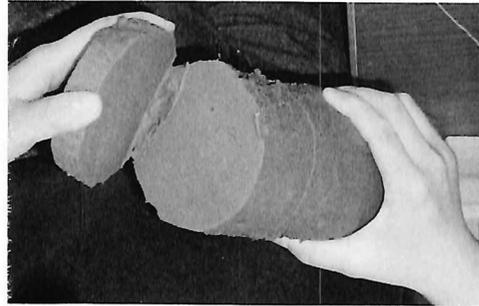


図32 粘土の切れ方

結果：両手が台座より下まで動き、粘土の下の部分までテングスが届くようになったが、まだつながりがあり、きれいに切れていない。

課題：粘土の台座に触れている底の部分よりも下にテングスがいくようにしたい。

・第3次

第2次で作成したものの台座の上に厚さ2 cmの板を置いて切る。



図33 第3次ジグ

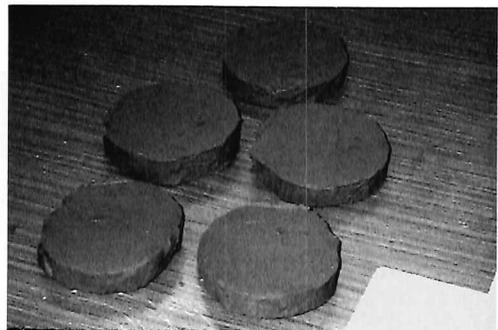


図34 粘土の切れ方

結果：テングスを持つ両手が粘土の底の部分より下にいき、つながることなくきれいに輪切りすることができた。

④「粘土切りジグ」を使用した実践事例

- ・対象生徒 本校高等部2年 男子（平成2年度）
- ・実態

本児は陶芸の作業を始め、技能面では全体的に向上が見られている。前年度は、主として、泥しょう鑄込み作業をしてきて、その中でも「修正」の作業を受け持ってきた。上達するにつれ興味や関心も増し、熱心に取り組めるようになってきた。しかし、早とちりすることが

多く、手順なども理解不足のまま自分勝手にやろうとするところがある。

・目標

自分の分担に責任を持ち、最後まで作業に取り組むようにさせる。

・指導の手だてと経過

「粘土切りジグ」を使用して、新たに、手びねり作業に取り組ませることにより、意欲を高めさせることを図り、目標達成をめざした。③で述べたジグを本児に使用させることにより、始めは上手く切れなかった粘土が段々改良されたものを使うと厚過ぎたり、薄過ぎたりすることなく、同じ厚さの粘土を量産することができるようになってきた。流れ作業で行っている手びねりの「粘土を切る」工程を受け持った本児は、次の工程の仲間を待たせることもなくなりスムーズに作業ができるようになった。また、作業に自信を持ち仲間に切り方も教えることができるようになり喜んで作業に取り組むようになった。

(3) まとめ

このようなジグを使っでの指導では、段階的に補助を少なくすることを考え、最終的にはジグがなくても作業ができるまでの技術を身に付けさせることが望ましい。しかし、障害が重い生徒たちにとって、「ジグ」により、作業能率を高めるという効果の他に、作業学習に参加するそのものへの意欲付けとしての効果がさらに期待される。個々の実態に応じたジグを作成し、作業工程の中で生かしていくことが最も大切と思われる。将来的には、ジグの改良によって、手指の機能が著しく遅れている生徒たちにも、粘土を切る工程をやらせることも可能であると考えている。そして、どの子にも活動に参加する喜び、作る喜び、できた喜びを味わわせていきたいと願う。

(高坂りゅう子, 堀井朋子)

注

1) これまでの報告として以下のものを発表している。

- ・秋山泉, 福田隆真, 宮崎龍次, 浜崎佳代子「養護学校における美術の教材に関する考察」山口大学教育学部研究論 第40巻第3部 1991
- ・秋山泉, 福田隆真, 石川昭枝, 島田憲貢, 宮崎龍次, 玉川佳寿美, 浜崎佳代子「養護学校における美術の教材に関する考察(2)」山口大学教育実践研究指導センター研究紀要第1号 1991
- ・小平征雄, 福田隆真, 梅村るみ子, 大西美恵子, 後藤雅宣, 高坂りゅう子, 堀井朋子「養護学校における美術の教材に関する考察(3)」北海道教育大学紀要(第1部C)第42巻第2号 1992
- ・秋山泉, 福田隆真, 宮崎龍次, 玉川佳寿美, 森本美香, 藤原淳嗣, 浜崎佳代子「養護学校における美術の教材に関する考察(4)」山口大学教育学部研究論 第41巻第3部 1992
- ・小平征雄, 福田隆真, 大西美恵子, 玉川佳寿美, 堀井朋子「養護学校における美術の教材に関する考察(5)」北海道教育大学紀要(第1部C)第43巻第1号 1992
- ・小平征雄, 福田隆真, 梅村るみ子, 堀井朋子「養護学校における美術の教材に関する考察(6)」北海道教育大学紀要(第1部C)第43巻第2号 1993
- ・秋山泉, 福田隆真, 山中佳寿美, 宮崎龍次, 浜崎佳代子「養護学校における美術の教材に関する考察(7)」山口大学教育学部研究論 第41巻第3部 1992

